

現象と文法

——ハイデガーとウイトゲンシュタイン

荒 畑 靖 宏

はじめに

- 一 存在・神・学から現存在分析論としての基礎存在論へ
- 二 存在論としての解釈学的現象学
- 三 解釈学的現象学と『論考』の「論理形式」
- 四 論理形式から文法へ、そして言語ゲームの事実性へ
- 五 文法の現象学

はじめに

L・ウイトゲンシュタインの哲学を広義の「現象学運動」⁽¹⁾と比較する研究には長い歴史がある。この研究の論題は、彼が生涯の折々に自身の研究スタイルをはっきりと「現象学」と呼んだことの真意の確定に始まり、同じく自身の研究を「現象学」と呼んだマッハやボルツマンといった一九世紀ウィーンの物理学者からの影響関係、フレーゲを間に挟んだ彼とフッサール現象学との関係性、彼の「直観」概念とフッサールの「範疇的直観」の理

論との比較、さらには「アスペクト知覚」や「意味盲」についての彼の晩年の議論の現象学的含意など、じつに多岐にわたる。⁽²⁾ 他方で、「現象学者としてのウイトゲンシュタイン」をめぐるこの研究よりやや遅れて、とくに後期ウイトゲンシュタインを M・ハイデガーの「存在と時間」⁽³⁾ における「現存在分析論と比較検討する研究も始まり、近年になっていくつかの興味深い成果を生みだすことになった。⁽⁴⁾ 本論考の主題も『存在と時間』のハイデガーの哲学とウイトゲンシュタイン哲学との関係性にあるが、しかし本論考が後者の研究伝統の正統であるかどうかは私には自信がない。というのも、以下で私が論じたいと思っているのは、フッサールに始まる現象学運動に対してハイデガーがもたらした周知の革新と類比的なものが、ウイトゲンシュタイン自身の哲学的遍歴の中にも指摘でき、またそれを解釈規範として彼の全哲学を眺めてみることで、彼の一貫した哲学的モチーフが新たに現れてくるかもしれないということのだが、その点にかぎって言うなら本研究は、少なくともハイデガーやガダマーが現象学運動の担い手に数えられるのと同じ意味では、ウイトゲンシュタインを——分析哲学の始祖のひとりという居心地の悪い玉座から降ろして——前世紀の大陸哲学のもっとも大きな流れの中に置くことになるからである。

この特異なねじれは、次の事情を考慮するならもつとはつきりするかもしれない。現象学とはなにかという問いに対して、それは経験（ないし意識）に直接与えられるものをいかなる仮説も抜きに記述することに徹する学だと答えることには（それではあまりに広すぎてほとんどなにも特定できないという批判を別とすれば）おそらく異論はなからう。するとこのかぎりでウイトゲンシュタインが「現象学者」であることに疑いがないのは、ハイデガーがそうであるのと同じである。「記述的現象学」というのは同語反復だと言うハイデガー（vgl. SuZ, 36）と同じように、「哲学は純粹に記述的である」⁽⁵⁾ というのが中期以降のウイトゲンシュタインの変わらぬ哲学観だったからである。しかし私の見るところ、われわれが両者の哲学的苦闘から学ぶべきなのは、純粹な記述、というも

のはある意味で神話であるという教訓である。しかも私は、このことの自覚こそが、彼らが徹底した「現象学者」であつたことの証左だと考えている。では、彼らの現象学はいかなる意味で「記述的」でありうるのか。まずはハイデガーの「基礎存在論」の構想から見ていくことにしよう。⁽⁶⁾

一 存在・神・学から現存在分析論としての基礎存在論へ

ハイデガーは一九二八年のフライブルク大学就任講演「形而上学とは何か」⁽⁷⁾で、「無への問い」(Frage nach dem Nichts)をすくれて形而上学的な問いとし、その問いに答えることを哲学の第一の責務とする。『存在と時間』を伝統的哲学の解体の序章として読む者たちは、この講演が同書出版の翌年のことであることに驚くかもしれない。しかし、この講演を一読すれば、この問いが『存在と時間』の延長線上にあることはすぐに分かる。彼がここで指摘しているのは、「無とは何であるか (Was ist das Nichts?)」と問うとき、われわれはじつに奇妙なことを、それどころか、不可能なことをやろうとしているということだからである。この問いはその形式からして、「無」を「ひとつの有るもの (ein Seiendes)」のように扱っている。こうして「無を——それが、つまり無が何であり如何にあるかを——問うことは、問いかけられたものをその反対のものへと逆転させる。その問いは自分で自分の対象を奪い去ってしまうのである」(GA 9, 107)。われわれは「無」とはなにかを知るために、「無」をいじくりまわして調べるわけにはいかないのだ。この「無」を「存在 (das Sein)」に置き換えるならば、それはそのまま『存在と時間』の問題となる。すると『存在と時間』は、それ自身が形而上学の手紙であるか、あるいはカント的な意味で「あらゆる将来の形而上学のための序説」⁽⁸⁾であることになるのだろうか。それに対する答えは「[ein (然りかつ否)]」である。そしてこの答えの根拠はやはり、ハイデガーが「古代哲学の学問的最高

峰」(GA22, 22) としたアリストテレスにある。

一九二六年マールブルク夏学期講義『古代哲学の根本諸概念』(GA22) からは「存在と時間」の執筆時期と重なっているせいもあって) ハイデガーの「基礎存在論」の着想がどこにあるか、なぜ存在論は「解釈学的現象学」として営まれねばならないのか、『存在と時間』がいかなる意味で古代形而上学の「反復」であるのか、などについて多くの示唆を得ることができる。⁸⁾ アリストテレスは『形而上学』の第六巻第一章で、第一哲学(形而上学)は神学であると同時に存在論であると主張している(1026a29-32)。なぜか。アリストテレスにとって、存在者を存在者たらしめるもの(その原因)はその存在者の存在であり、これを主題とするのは存在論であるが、しかし「存在」そのものは「不動の実体」(sub.)を原因とするはずなのだから、「存在者としての存在者の第一の原因」(1003a28f.)ですらあるこの最高の、もつとも本来的な存在者——神——を対象とする学(神学)こそが第一哲学でなければならぬからである(この枠組みをハイデガーは後年「存在・神・学」(Onto-Theo-Logie) (GA32, 141)と呼ぶことになる)。このアリストテレス形而上学の理念のうちに見られる「存在的説明と存在論的解釈」(GA22, 150)の混在をハイデガーは存在についての学における「迷いの段階」(GA22, 149)として、この二重概念の克服をみずからの課題とする。しかしその克服は、この二重性を完全に消去してしまうようなものではない。なぜか。それは、「無」と同じように「存在」も「xとは何であるか」という形式の問いを受けつけないという意味では、アリストテレスが「存在」にもつとも関わりの深い存在者に訴えたことはなんといっても正当だからである。「存在論をそれ自身純粹に存在論的に根拠づける」とはできない」(GA24, 26)のであり、存在論においてわれわれは、なんらかの「範例的存在者」(Sub. 7)に依拠して、そこから存在の理念を読みとるしかないのである。むしろハイデガーが克服しようとしたのは、存在者の原因は存在であり、存在の原因はもつとも存在者らしい存在者であるとする存在的・存在論的混同と、範例的存在者を神的なものに求める学的態度である。

『存在と時間』の読者には、これらが同書でそれぞれのように克服されたかは周知であろう。範例的存在者は、つねに漠然とであれ「存在」を理解しつつ実存しているわれわれ人間——現存在 (Dasein) ——に求められ、「存在者一般・存在・範例的存在者」という疑似因果連関は、現存在の日常的存在了解から「存在の意味 (Sinn von Sein)」を解釈するという構図へと転換される。したがって、基礎存在論を現存在分析論のうちに求めることは、細川の言葉を借りるなら、「存在論・神学としての形而上学 (第一哲学)」に対する一つの決定⁽⁹⁾を意味するのである。

二 存在論としての解釈学的現象学

ところが周知のようにハイデガーは、その基礎存在論の方法は現象学でなければならないと主張する(「現象学は、存在論の主題となるべきものへの接近方法であり、またそれを証示しつつ規定する方法である。存在論は現象学としてのみ可能である」(SuZ, 335))。ここで言われているのは当然、彼の師であったフッサールの「現象学 (Phänomenologie)」のほずである。そのフッサールにとって「現象」とは、現象学的還元を生き残った純粹意識に「意味」として直接与えられるもののことであり、「現象学」とはその直接的与件の純粹な記述に徹する学である。しかしハイデガーは、この現象概念に(したがって現象学の概念にも)複雑な読み替えをおこなう。『存在と時間』の第七節は彼独自の現象学概念が主題的に論じられている箇所だが、そこで彼は現象を「さしあたりたいていはまさに姿を見せない、ところのもの、さしあたりたいてい姿を見ているものとは逆に隠されてはいるが、しかし同時に、さしあたりたいてい姿を見ているものに本質的に属しており、しかもこのものの意味と根拠をなすというふうに属しているようなものであるところのもの」(SuZ, 35)と定義している。この「さしあた

りたいい姿を見せているもの」をハイデガーは通俗的現象概念と呼ぶが、それが指すのは、日常的にわれわれに對して現れる「存在者 (Seiendes)」のことである。すると、この存在者の意味と根拠をなすものとは「存在者の存在」であることになる。なぜなら彼にとつて「存在」とは「存在者を存在者として規定する当のもの、たとえ存在者がどのように論究されようとも、存在者がそれを目当てとして (woranhin) そのつどすでに理解されている当のもの」(SuZ, 6) のことだからである。すぐ分かるとおり、これはアリストテレスの存在・神・学の構図の改編でもあると同時に、フッサール現象学の現象学的還元⁽¹⁾の換骨奪胎でもある (vgl. GA24, 26f.)。現象学とは、さしあたりたいい姿を見せず隠されている「存在者の存在」を明るみにだす方法なのである。

だが、ここで問題が生じる。現象学とは還元の結果得られた現象をそれが与えられるがままに記述する学のことである。しかし、たとえば三次元立体知覚やメロデー知覚などの現象学的記述と同じように「存在者の存在」を記述することなどできはしない。ここにハイデガーのもうひとつの「決定」がある。それは「現象学的記述的方法的意味は解釈 (Auslegung) である」(SuZ, 37) という解釈学的な決定である。存在者の存在は、当の存在者と同じ意味で「ある」のではなく、それは存在者の理解の「目当てとなるもの (das Woraufhin)」である。そうだとすると、現存在にのみそなわる存在了解にも、理解の「目当てとなるもの」があるはずである。⁽¹⁾ハイデガーはこれを「あらゆる存在了解一般の可能な地平」(SuZ, 1) と呼び、この地平が「時間」であることを示すことこそが基礎存在論の最終目標であるとするのである (これが、存在・神・学の構図の「存在の原因としての神」に対するハイデガーの修正にもなっていることは明白であろう)。「存在は時間から概念的に把握されるべきであり、また存在のさまざまな様態や派生態も、それらがどう変換し派生するかについては、事実、時間に着目することから理解可能となる」(SuZ, 18)。かくしてハイデガーの現象学は、現象学的方法によって得られた現象 (存在者の存在) をその理解地平としての時間から解釈する現象の解釈学——解釈学的現象学——となる。

ここで、『存在と時間』のうちに流れ込んでいるもうひとつの哲学的伝統を指摘しておこう。ハイデガーは現象学の現象概念を説明する過程でこう言っている。「現われ (Erscheinungen) において、すなわち通俗的に理解された現象において、非主題的にはあれそのつど先行的に、また同伴的に、すでに姿を見せているものは、主観的に姿を見せるようにすることができるのであり、そして、このようにして自分自身で姿を見せるこのもの (直観の形式) こそが現象学の現象である」(SuZ, 31)。ハイデガーはここではつきりと、カントの超越論的観念論において経験的直観のアプリオリな形式的条件とされる時間と空間を、現象学の意味での現象と等置している。これによって、『存在と時間』の基礎存在論の中に超越論的な構えが持ち込まれることになるが、これはなによりも「存在」に超越論的な身分を与えることになる。⁽¹⁾カントの超越論的観念論の核心は、経験の可能性の条件が同時に経験の対象の可能性の条件でもあるということなのだから、「存在」は、存在者を存在者たらしめるもの (存在者の可能性の条件) であると同時に、われわれが存在者を存在者として理解するための可能性の条件 (「世界の中で、内世界的存在者との交渉」(SuZ, 66f.) の可能性の条件) でもあることになる。こうした脈絡であらためて「存在それ自体は存在者ではない」というハイデガーのテーゼを考えてみると、『存在と時間』の解釈学的現象学と『論理哲学論考』⁽¹²⁾ (以下『論考』) との、とくに「論理形式」についてのウイトゲンシュタインの考えとの親近性が見えてくる。

三 解釈学的現象学と『論考』の「論理形式」

ステニウスが早くから指摘しているように、⁽¹³⁾『論考』とカントの『純粹理性批判』には対応関係が見られる。後者の目標が理性の権利と限界を画定することにあるのに似て、前者の目的は「思考に限界を引く」(WAL, S.9)

ことによって、思考しえないもの——語りえないもの——については沈黙を命ずることにある。とくに、カントが純粹悟性概念の超越論的演繹をもって果たそうとしていたことを、ウィトゲンシュタインは言語の論理分析によつて果たそうとしたのだと見ることが出来る。『論考』をそのような視座から見た場合、解釈の重点は、カントの「経験のアプリオリな形式的条件」に対応するもの、すなわち世界の実体をなすとされる「対象 (Gegenstand)」の「論理形式 (logische Form)」なつし「内性的性質 (interne Eigenschaft)」に置かれることになる。

『論考』の対象理論は、ラッセルの「見知りの理論 (theory of acquaintance)」を批判的に継承したものである⁽¹⁴⁾。ラッセルは、われわれの知識を「記述による知識」と「見知りによる知識」とに二分し、後者を、なんらかの真理 (なんらかの命題の真偽) についての知識やなんらかの推論といった媒介なしに対象を直接見知っていることとして定義する⁽¹⁵⁾。ラッセルの知識論は、この無媒介的な直接知からわれわれの全知識を構築することを理想とする。だが、そこにはひとつ問題がある。たとえば aRb のような単純な判断を構成するためにも、われわれは a と b が表す個物と関係 R を見知っているだけでは不十分である。というのも、われわれが知っているのがそれだけならば、 R が非対称の関係である場合でも、 bRa とつた判断の構成を妨げることはできないからである。そのためにはわれわれは、 a と b という論理形式を見知っていなければならない。かくしてラッセルは、論理形式を独自の存在者として認め、論理形式の直接知——「論理的経験」——をわれわれの思考と知識の不可欠の前提条件とするのである⁽¹⁶⁾。『論考』のウィトゲンシュタインも、論理の基礎に見知りを置くこうしたラッセルの影響下にあった。ウィトゲンシュタインにとつても、世界の論理的秩序の礎石である論理の原子は直接的な所与でなければならなかったのである。しかし、終生変わらぬ反プラトニストであったウィトゲンシュタインは、独立の論理の対象の存在とそうした対象についての論理的経験というものを許すことができなかった⁽¹⁷⁾。師のラッセルに対する彼の「決定」は、われわれの見知る対象それ自体がすでに論理形式をそなえているのであって、われわれ

れが対象を見知っているのなら、われわれはそれと他の対象との結合の可能性をも見知っているのでなければならぬという考えである。「私が対象を捉えるとき、私はまたそれが事態のうちに現れる全可能性をも捉える。(そうした可能性のいずれもが対象の本性のうちにあるのでなければならない。)」(T 2.0123)これが命題の構成の可能性の秘密である。ウィトゲンシュタインは、第一次大戦従軍中に書きためていたノート『論考』の元となったもの(1)に次のように書いている。「私の課題全体は、命題の本質を説明することに存する。すなわち、命題がその像であるところのすべての事実の本質を述べること。すべての存在の本質(das Wesen allen Seins)を述べること。(そしてこの存在は実在する(existieren)を意味するのではない——もしも意味するとしたらそれは無意味となる。)⁽¹⁸⁾」ここに例の「存在それ自体は存在者であるのではない」というハイデガーのテーゼの変奏を聞くことに無理はないであろう。⁽¹⁹⁾対象の結合の可能性はそれ自体がまた別の対象であるのではないというのが、ウィトゲンシュタインのこの「決定」の眼目なのだから。このようにそのあらゆる結合可能性ともども与えられる対象が世界の実体を形づくる(vgl. T 2.021)。世界の原子的単位に言語の側で対応するのが「名」である。名の単純な結合が「要素命題」と呼ばれる。要素命題は、ある意味で、世界の原子的事態の単純な「像」である。像とその像によって写されるものは論理形式を共有する(vgl. T 2.2)。有意義な命題はすべて——要素命題自身も含めて——要素命題の真理関数である(vgl. T 5)。真理関数理論は、名と対象の単純な対応(代理)関係ならびに要素命題と原子的事態との写像関係をありとあらゆる命題へと拡張・保全する。かくして、「論理は世界を満たす」(T 5.61)——対象の論理形式と真理関数的操作が「論理空間」を画定する——のである。

とはいえ『論考』を、単にカント哲学を言語論化しただけのものと見るのは誤りである。前節の最後に示唆したように、『論考』には、われわれの哲学的営みはすでに与えられている事実的な全体の中から出発せざるをえず、またその全体から外に脱出することはできないという「解釈学的循環」(vgl. SuZ, 152f.)の思想が見られる。

このことは、世界とその論理的秩序の礎石としての、すでに論理形式をそなえて見知られる対象というウィトゲンシュタインの考えだけに着目しているあいだは明らかにならないかもしれない。その点では、彼の立場はラッセルの論理的原子論の変奏でしかないように見えるからである。しかし、対象そのものがそのすべての結合可能性をそなえて見知られるとはいかなることかを考えてほしい。対象とは『論考』においては世界の側の単純者である。単純者とは、それ以上分解・分析不可能なものである。しかし、世界の中でなにが究極の単純者であるのかを究明することは、哲学の仕事ではなく経験科学の仕事である。そうだとしたら、その世界探索の結果である単純者の発見と同時に「それが事態のうちに現れる全可能性」が汲み尽くされ、「後から新たな可能性が発見されることはありえない」(T2.0123) などということはいかにして可能なのか——だが、こうしたことに頭を悩ませる者は、じつは彼が『論考』の読者たりえていないことをみずから証明しているのである。たしかに『論考』は、世界そのものについての存在論的主張から始まる。しかし『論考』は、その各命題を追ってゆく読者自身がある意味で「進化する」よう仕組まれた書である。周知のように『論考』は、最終的には読者が「世界を正しく見る」ことができるための「はし」として自身を位置づけている (vgl. T6.34)。これが意味していることのひとつは、前半の世界についての存在論的主張はすべて中盤以降の言語の像理論の帰結でしかないということに読者が気づくということである (『論考』の執筆順序は事柄の秩序とは逆になっているのだと言える)。したがって、対象の単純性は、「名」が原始記号であること——定義を用いてさらに分解することができないこと (vgl. T3.26) ——をもってしか与えられず、対象の論理形式——全結合可能性——は「名」のそれとしてしか与えられないのである。だが、『論考』における真の意味で決定的な一歩は次の考えである。

記号においては表現されえないことを、記号の使用が示す。その記号が呑み込んでいるものを、記号の使用が表にあら

わす。(T 3.262)

原始記号の意味は解明 (Erläuterungen) によって明らかにされうる。解明とは、その原始記号を命題の中で用いることである。ゆえにそれらの記号の意味にすでになじんでいるひとだけが、解明を理解できる。(T 3.263; 強調引用者)

命題のみが意味内容をもつ。名は、ただ命題という脈絡の中でのみ、指示対象をもつ。(T 3.3)

対象と名の代理関係ならびに両者の論理形式の共有関係を、問題の言語の外部にある者に「定義的説明」によって理解させることはできない。私は「私が理解する唯一の言語」(T 5.62) が与えられている状況から出発するしかない。存在論が、いつもすでに「存在」を理解しつつ実存しているわれわれ自身の存在了解をその地平へ向けて解釈することによってしか可能でないのと同じように、ある言語のうちに投げ込まれている私自身が私の言語の中から「すべての存在の本質」を読みとるしかないのである。「命題は論理形式を描写できない。論理形式は命題に反映されている。言語に反映されていることを、われわれは描写できない。言語においておのずと表現されているもの、それをわれわれが言語で表現することはできない。命題は現実の論理形式を示す」(T 4.121)。だからこそ「哲学の仕事は本質的に解明からなる」(T 4.112) のである。これは、言ってみればウイトゲンシュタインのもうひとつの「決定」、もうひとりの師であるフレーゲの「文脈原理」に対する決定であり、同時に、『論考』の企図をハイデガーの基礎存在論と結びつける紐帯でもある。

四 論理形式から文法へ、そして言語ゲームの事実性へ

『論考』以降にウィトゲンシュタインがたどった哲学的軌跡を、「悟性の向けられる対象の違いにはかかわりなく悟性を扱う」⁽²¹⁾ カント的な「超越論的論理学」からの脱却の過程として特徴づけることは不当ではなからう。発端は『論考』の中にあった。「たとえば二つの色が同時に視野の同じ場所を占めることは不可能であるが、それは実際、色の論理的構造によって排除されており、それゆえ論理的に不可能である」(T 6.3751)。有名な「色の両立不可能性問題」である。当時の彼は、この排他的関係を含意する「色の論理的構造」を、真理関数理論で扱える論理的真理の単なる一例として処理することができると信じていた。いやむしろ、そうでなければならぬと彼は頑なに信じ込もうとしていた。要素命題の純粋な像的性格をすべての複合命題に拡張するためには真理関数理論の完全性が必要であり、真理関数理論の完全性のためには、要素命題は真理関数的論理性とは別の独自の論理性をもっているはず、したがって要素命題は相互に論理的に独立でなければならぬからである (cf. T 4.211, 5.134)。しかし、この問題が自身の哲学の棘であることに彼は気づいていたのであろう。一九二九年の哲学復帰後に彼がまっさきに取り組んだのは、ほかならぬ色の両立不可能性問題の論理的解決だったからである。同年の論文「論理形式についての若干の所見」で彼は、「現象を描出するために数(有理数および無理数)が原子命題自身の構造のうちに入ってこなければならぬ」ということを認めるにいたる。だがこれは実質上、真理関数理論の完全性の放棄である。だが、それでもまだこの時の彼は、色の両立不可能性問題があるタイプの論理的関係の一例として処理できるように「完全な表記法」(PO, 36) が手に入るはずだと考えた (cf. PO, 29-30)。この統一的表記法の理念が背景に退いてゆくのは、「文法 (Grammatik)」概念が彼の考察に頻出するようになった頃からである。「真偽表記法によって私が描出した「かつ」「ないし」「ない」などに関する規則は、これらの

語の文法の一部ではあるが全部ではない⁽²³⁾。かつて色の論理的構造を普遍的論理の中に統合しようとしたワイトゲンシュタインは、いまや「色語 (color-words)」の文法というローカルな論理領域に繊細な目を注ぐようになる。いまや彼は、われわれの世界記述の個別文法の堅実な確認のはてに「すべての存在の本質」が明らかになるはずだと信じたのである。「……」哲学は文法の管理人として、実際に世界の本質を把握できる。ただしそれは言語の命題という形でなされるのではなく、無意義な記号結合を排除するためのこの言語に対する規則という形でなされるのである」(PB, 54)。いっから明らかとなり、『哲学探究⁽²⁴⁾』(以後『探究』)の主題のひとつである「規則」は、『論考』の「論理形式」の遠い後裔なのである。

この経緯を追うために、話を少し戻すことにしよう。要素命題の中に数を導入したワイトゲンシュタインは、一時期、言語の本質は、数と等式を用いた形式的な記号操作という意味での「計算」であるという考えに傾いた。この変化において重要なのは、かつて『論考』においては静的な秩序であった論理のうちに動的な要素が認められるようになったことである。このことは、『論考』における命題と現実との静的な「比較」概念 (vgl. T 4.05) が、ダイナミックで全体論的な「検証」概念へと変化したことにも現れている。だが、この時期のワイトゲンシュタインの思考の変化には慎重であらねばならない。この時期の彼の疑似検証主義から言語とゲームのアナロジーまでの距離は、ふつう考えられているほど遠くはない。命題の意味はその命題が指定する、検証の手続きにあるという考えと、王将の駒に意味を与えているのは将棋というゲームのルールであるという考えとの類比で考えられた、語の意味はその使用規則であるという考えとは隣り合わせである。だから、それはまだ、命題と世界のあいだに人間がいることをワイトゲンシュタインが(後の『探究』以降のように)真摯に受けとめるようになったということを意味するわけではない。現に彼は、『哲学的文法⁽²⁵⁾』の元になった草稿を書いていた時期には、ある語の直示的定義がその語の使用規則を与えるという驚くべき考えにコミットしていたが (vgl. PG-I, 12, 24, 42, 56,

138)、ここからはまだ、論理形式を完備して見知られる対象という『論考』の考えの残響が聞きとれる。しかもこの考えは『青色本』の中にも依然として見られるのである (cf. BB, I.: 37)。決定的なのはむしろ、語の意味としての使用規則という考えが、われわれが現におこなっている言語ゲームという事実的・全体論的背景のもとでしか意味をなさないということの自覚なのである。したがって、一九三三年頃まで頻繁に使われていた言語使用と計算とのアナロジーが『青色本』からぱったりと用いられなくなったことの理由は、われわれの現実の流動的な言語活動を厳密な数学的規則に支配された計算活動との類比で考えることの無理にウイトゲンシュタインが気づいたことにある、と考えることはできない。それはむしろ、数学的活動のそれもふくめてあらゆる規則について、そもそもいかにして規則はわれわれの言語使用と行為を規定しうるのか、という根本的な問題に彼が直面したためなのである。⁽²⁶⁾ われわれは、後に『数学の基礎についての覚え書き』⁽²⁷⁾として死後出版された数冊のノートに見られる数学の哲学に、彼が『探究』の執筆を中断してまでも一時期没頭したということの、また『探究』の規則遵守の議論がよりによって初等算術の例で始められている (vgl. PU-I, 143) とこのことの意味を考えてみさえすればよい。言語ゲームという考えが本領を発揮するのはこの問いの脈絡においてである。規則遵守の最終的な審級は慣習・風習・制度などのすべてを巻き込むものとしての言語ゲーム——その意味でこれは「生活形式 (Lebensform)」(PU-I, 19, 23, 241) とほぼ同義である——であって、われわれが事実としてプレイしている言語ゲームという基盤を欠いては、規則と規則遵守の問題は意味を失うことになる。それは、たとえどれほど目立たず漠然としたものであっても、現存在の事実的な存在了解なくしては、存在への問い——存在の意味への問い——がそもそも不可能であるのと同じなのである。

五 文法の現象学

最後に私は、「はじめに」でおこなったややパラドクスめいた断言について釈明をしなければならない。それは、「哲学は純粹に記述的である」(BB, 18) という中・後期ウィトゲンシュタインの信念にもかかわらず、彼ら全哲学から学べるのは純粹な記述というものである意味で神話であるということだ、という主張であった。しかし、この逆説的な見かけは、ウィトゲンシュタインのその信念と、たとえばフッサールのような哲学者が「哲学は純粹に記述的な学であるべきだ」と主張する際の動機づけを較べてみるならば消え去るはずである。フッサールが現象学において純粹な記述を求めるのは、還元の結果得られた現象学のフィールドとしての純粹意識の領分が、あらゆる知識と信念を究極的に合理化し正当化する諸根拠の領域だからである。たしかに後期のウィトゲンシュタインも、哲学は個別の議論領域に内在して慎ましく文法を記述し続ける営み(「文法的考察」(PU-I, 90))であらざるをえないと言う。しかし彼がそれと言わんとしているのは、われわれにできるのはせいぜい記述、ぐらいいのものだということ、しかもわれわれはそれにあまり多くを期待することはできない、ということなのである。「哲学はけっして実際の言語使用を侵害してはならない。つまり哲学は結局のところそれをただ記述することしかできないのである。なぜなら哲学はそれを、根拠づけることもできないのだから。哲学はすべてを、そのあるがままにしておく」(PU-I, 124)。したがって、あまり多くを期待できないというのは、あくまでも相対的な評価である。つまり、プラトン以来の長い哲学の歴史の中で当然のように哲学に期待されてきたことが、すなわち、われわれの知識と信念を、われわれの行為を、われわれの世界と宇宙の仕組みを、経験科学にはとうてい及びえないような深い次元で正当化し、合理化し、根拠づけることが期待されているのなら、そんなことはできないということである。「文法は、言語がみずからの目的を果たすためには——人間に対してしかじかに作用するためには

——— どのような仕組みをしていなければならないか、を語りはしない。文法はただ記号の使用を記述するだけであって、けっしてそれを説明しはしないのである」(PU-I, 496)。しかし、ひょっとするとその伝統的な期待のほうが不当であったという可能性はないのだろうか。『探究』以後のワイトゲンシュタインの哲学的苦闘の核心は、その不当性の告発にあると言っても過言ではない。あらゆる正当化も合理化も根拠づけも、われわれが事実プレイしている言語ゲームの中にしかない。「われわれの誤りは、われわれが事実を「根源現象 (Urphänomene)」として見るべきところで、すなわち、こ、う、い、う、ゲ、ー、ム、が、プ、レ、イ、さ、れ、て、い、る、の、だ、と、言、う、べ、き、と、こ、ろ、で、な、ん、ら、か、の、説、明、を、求、め、て、し、ま、う、こ、と、で、あ、る」(PU-I, 654)。われわれの住んでいる洞窟の外がかりにあるとしても、そこには洞窟の中のわれわれの生活を正当化し根拠づけてくれるものなどないのだ。彼のメッセージはこうである。「言語ゲームを記述せよ！ そうすればそこから、正当化されている (Berechtigtsein) ということの重要さも読み取れるであろう」(PU-I, 486)。

こうしたワイトゲンシュタインのメタ哲学——文法の現象学²⁸⁾——を無視することによって生じる典型的な誤解のひとつが、「文法の恣意性」にまつわる議論である。しかしこれは逆に、この誤解を解くことによって、ワイトゲンシュタインの「文法」概念に込められた彼のメタ哲学も明らかとなるかもしれないということを意味している。ワイトゲンシュタインが文法や規則を話題とするとき、彼はかならずと言っていいほどそれらの恣意性を強調する。ここで生じがちな誤解は、われわれの言語の文法の恣意性に、暗黙のうちに世界の必然的秩序を対置することによって、ワイトゲンシュタインのうちに規約主義や、はては観念論的な要素を見たりすることである。しかし右で見たように、彼のおこなっている「文法の記述」は、われわれのやっていることの本質の説明でもなければその正当化や根拠づけでもないのである。ワイトゲンシュタインはすでに一九三一年の講義で次のように言っていたと報告されている。

もし文法が、音が赤いと言うことはできないと言うならば、これは、そのように言うことが偽だというのではなく、ナ
ンセンスだということ——つまりそれはそもそも言語ではないということの意味する。それゆえ私は、色がもたない特
性を音がもつと言うことはできない。なぜならその場合には私は、色が色のもたない特性をもつと有意味に言うことが
できなければならないからである。あるものを色と呼ぶことは、それが一定の文法規則に従うと言うことである。⁽²⁹⁾

文法は恣意的なのか。(……) 正当化されえないという意味では、答えは然りである。しかし、私がどのような文法規
則を利用できるかは恣意的でないというかぎりにおいては、それは恣意的ではない。それだけで記述されるならば文法
は恣意的である。それを恣意的でなくするのはその使用である。(L.I, 49)

文法の規則は、ゲームのルールが恣意的であるのと同じ意味で恣意的である。われわれはそれらを別様にすることがで
きる。だがそのときそれは異なつたゲームとなる。(L.I, 57; 強調引用者)

文法の恣意性をワイトゲンシュタインが強調するとき、彼は、われわれは本来恣意的である文法に従っているの
だと言いたいのではない。そうではなくて、規則が「文法化 (grammaticalize)⁽³⁰⁾」されるとき、それはわれわれ
が従わざるをえないものとして提示されているわけではないし、またそのようなものとして提示することは不可
能だと言いたいのである。これこそが、『探究』での規則遵守についての息の長い議論からわれわれが学ぶべき
第一の教訓である。規則をそのまま取り出すならば、いかなる「解釈 (Deutung)」もその規則の意味を決定で
きず、その規則に従うわれわれの行為も決定できない (vgl. PU-I, 198)。われわれはけつして恣意的に行為して
いるのではないが、いかなる文法命題も、われわれをただこのようにしか行為できないように規制することはで

きないのである。ウイトゲンシュタインが言語とゲームの類比について次のように言っていることに注意すべきである。「(……) 言語に対する文法の関係は、あるゲームに対するそのゲームの記述、つまりそのゲームの規則の関係に似ている」(PG-I, 23) と。決定的なのは、ゲームの「記述」がゲームの「規則」と等置されているということである。ここにあるひとつの大きなずれに気づくことが、ウイトゲンシュタインの文法概念を理解するための近道である。なぜなら通常、たとえば将棋のルールを知らない者が、対局している二人の棋士の手を最初から最後まですべて記述しても、それがそのまま将棋のルールブックにならないことは明白だからである。したがって、ウイトゲンシュタインの規則遵守論の帰結を「発見されるのを待っている隠れた規則、すなわち、まだ定式化できていないが、われわれが暗黙裏に知っていて従っている規則などありえない」とする解釈は、ウイトゲンシュタインの真の見解の代弁としてはあまりうまくない表現である。ウイトゲンシュタインは最晩年のノートに、「私はますます、論理は結局のところ記述されえないと言う方向に向かっているのではないだろうか。お前は言語の実践を観察しなければならない。そうすれば論理が見える」と書いてあるからである。重要なのは、それが見えるのは、その言語ゲームの実践者、いわばその言語の内に住み込んでいる者だけだということである。したがって論理は、それが記述されたとき、その記述が「なぜわれわれはかくすべきなのか」を説明し正当化するものとして期待されているかぎり、もはや期待はずれのものとなる。ウイトゲンシュタインが文法の恣意性を強調するのは、文法化された規則や記述された論理にあまり多くのことを期待してはならないということを言い添えるためなのである。

では、哲学において文法を記述することの眼目は——もしもそれが世界の必然的な本質を明るみに出すことにあるのなら——どこにあるのか。それは『探究』を読んだ者なら誰もが知っていることである。すなわち、われわれの文法を「展望が利く (übersichtlich)」ようにすることによって、哲学的問題がわれわれの言語

の誤解から生じていることを明らかにすることである。「われわれの無理解の主たる源泉は、われわれが自分たちの語の使用を展望できていないということである。——われわれの文法には展望 (Übersichtlichkeit) が欠けているのである」(PU-I, 122)。

これを理解するために、『論考』から晩年の『色彩について』⁽³³⁾に至るまで終生ウイトゲンシュタインの関心を引きつけていた「色」に関して彼が実際にどのような文法記述——文法の現象学——をおこなっているかを簡単に見てみよう。『哲学的考察』で彼は、色の個別文法(「色空間」(PB, 1)の構造)は、ニュートン以来の光学的色彩理論に基づく色相環によつては描出されえないと指摘する。たとえば、四原色の論理構造が中間色のそれと異なること、また白と黒の論理構造もまた後者とは別の仕方で前者と異なること、また「橙は赤と黄色の間にある」と「赤は紫と橙の間にある」の二つの「の間にある」が意味を異にすること、こうした文法を色相環は表現できないのである。そこで彼は、こうした論理が一目で理解できる「色八面体」(vgl. PB, 1)のほうが色空間の描出形式として色相環よりも優れていると結論づける(「八面体による描出は文法規則の展望の利いた描出である」(PB, 1))。この事例は、ウイトゲンシュタインが「文法」と呼ぶものの哲学的身分をよく表している。この八面体は発見されたものではない。その意味は、右のような色の論理を直観的に理解できる者であれば暗黙裏に知っているはずのものとしてそれが提示されているのではないということである。つまりそれはなにかを説明するためのものではないのだ。それはむしろ、われわれに文法への展望を与え、無用な混乱や誤解から無用の哲学的問題(色の本質にかかわる形而上学的な難問)が生じないようにするためのものなのである(vgl. PB, 220)。「展望的な描写は理解の助けとなるが、理解することの本義はまさに、われわれに「連関が見える」ということにある。それゆえに、中間項を発見したり案出したりすることが重要となるのである」(PU-I, 122)。

意外に思われるだろうが、ここでふたたびハイデガーに登場を願ってしかるべきである。私が思うに、われわ

れがいまウィトゲンシュタインの文法概念を見てきたような視点から、ハイデガーの独特な諸概念を見ることによって、それらの概念に対して執拗に浴びせられてきた批判の少なくとも一部は的外していることが見えてくる。批判者いわく、人間を「現存在」とする規定はこの複雑な人間存在の実像をとらえるにはあまりにも貧しい、あるいは、現存在の存在（実存）は、「内世界的存在者」として一括される対象的存在者（Vorhandenes）や道具的存在者（Zuhandenes）の存在とは根本的に異なっているため、アリストテレス以来の伝統的な「範疇（Kategorien）」とは根本的に異なる「実存範疇（Existenzialien）」によって記述すべきだとされるが（vgl. SuZ, 45）、ただ言葉を話し思考できるという点だけが動物と異なる人間がそれ以外のありとあらゆる存在者と根本的に違っており方をしているとはとても考えられない、あるいは、ハイデガーはこの多様な側面をもつ人間存在をひとり「氣遣（Sorge）」だけに還元しようとしている、等々。ハイデガーはこうした批判に対して、すでに『存在と時間』の中で、自分は十全な哲学的心理学や哲学的人間学を指向したのではなく、あくまで普遍的存在論のための基礎存在論を目指したのだと抗弁している（vgl. SuZ, § 10）。ハイデガーのこの声を聞き入れない者は、文法の恣意性を指摘するウィトゲンシュタインに観念論や規約主義を読み込む者と同じ過ちを犯してはいないだろうか。「現存在」とは、日常的に存在を曖昧にであれ理解しつつ生きている、存在論の範例となる存在者を指すのであって、「人間」の同義語ではない。したがって実存範疇も、存在論にとつての範例たるかぎりでの人間存在の構成要素である。しかも、時間性を「目がけて」理解されるべきものとして意匠されたものである。さらに言うと、有限な人間存在にとつて異質な借り物の時間性を伝統的存在論が理解地平としていることを暴露するため手の込んだ道具立てである。この意味で実存範疇はウィトゲンシュタインの色の正八面体と類比的である。こう見るなら、ハイデガーが実存範疇をすべて氣遣いに還元しようとしているという非難が誤解であることは明白である。現にハイデガーは、ありとあらゆるものが「ひとつの単純な原根拠（ein einfacher Urgrund）」（SuZ,

(13) から生じることを示そうとする傾向が存在論において支配的であることを批判している。それこそが、彼が克服したいと願った「存在・神・学」の構えだからである。彼は、すべての実存範疇を気遣いに還元しようとしているのではなく、すべての実存範疇を時間性に向けて解釈することを可能にするものとして、その存在論的意味がまぎれもなく時間性であるようなものとして (vgl. SuZ, § 65) 気遣いを「案出」したのである。現在在と実存範疇と気遣いについて語る『存在と時間』の言葉は、いわば文法的命題なのである。

(1) Cf. Herbert Spiegelberg, *The Phenomenological Movement*. 3rd ed., The Hague: Martinus Nijhoff, 1982.

(2) へんに挙げておきたうのせ、Nicholas Gier, *Wittgenstein and Phenomenology: A Comparative Study of the Later Wittgenstein*, Husserl, Heidegger, and Merleau-Ponty. Albany: State University of New York Press, 1981; Merrill B. Hintikka and Jaakko Hintikka, *Investigating Wittgenstein*. Oxford: Basil Blackwell, 1986; Jaakko Hintikka, "The Idea of Phenomenology in Wittgenstein and Husserl," in his *Ludwig Wittgenstein: Half-Truths and One-and-a-Half-Truths* (Dordrecht: Kluwer, 1996), pp.55-77; Byong-Chul Park, *Phenomenological Aspects of Wittgenstein's Philosophy*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 1998 などである。

(3) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*. Tübingen: Niemeyer, 1920 (1927). フォト、同書からの引用の出典は略記 SuZ ならびに頁数を本文中に記す。また、ハイデガー全集 (Martin Heidegger Gesamtausgabe, F.-W. v. Herrmann et al. (Hg.), Frankfurt. a. M.: Klostermann, 1975ff.) からの引用の出典は略記 GA ならびに巻数・頁数や へんに本文中に記す。

(4) へんに挙げておきたうのせ、George F. Seifert, *Language and the World. A Methodological Synthesis within the Writings of Martin Heidegger and Ludwig Wittgenstein*. Atlantic Highlands, N. J.: Humanities Press, 1974; Thomas Rentsch, Heidegger und Wittgenstein: Existential- und Sprachanalysen zu den Grundlagen philosophischer Anthropologie. Stuttgart: Klett-Cotta, 2003; Stephen Mulhall, *On Being in the World: Wittgenstein and Heidegger on Seeing Aspects*. London/N. Y.: Routledge, 1990; *Inheritance and Originality*:

Wittgenstein, Heidegger, Kierkegaard. Oxford: Clarendon Press, 2001 などによる。

- (c) Ludwig Wittgenstein, *Preliminary Studies for the "Philosophical Investigations," Generally Known as The Blue and Brown Books* (edited by R. Rhees, Oxford: Blackwell, 1958), p.18. 以下、同書からの引用の出典は略記 BB ならびに頁数を本文中に記す。

(6) 本論考は、目下計画中の書『現象の解釈学／文法の現象学』（仮題）の研究計画書という性格をもつ。この書は残念ながら大部のものになる気配が濃厚であり、したがって以下の論述には、あまりに専門的なところ、生硬なところ、説明不足のところが散見されざるをえない。しかし、「暴走」する私を常に温かく見守ってくださった藤山先生であれば、若輩の弟子の貧弱なストックからの切り売りよりは、若輩者らしく不肖の弟子らしいあいかわらずの大言壮語のほうを喜んでくださるのではないかと、ひとりよがりの正当化に落ち着いた次第である。

- (7) GA 9, 103-122.

(8) これに関しては、細川亮一『ハイデガー哲学の射程』（創文社、二〇〇〇年）の第一章を参照せよ。

- (9) 細川、前掲書二〇四頁。

(10) Vgl. GA34, 18:「理解されるものはけっして意味でさえない。われわれはあるものを意味として理解するのでなく、つねにただあるものを「……という意味で」理解する。意味はけっして理解の主題ではない」。

(11) これは『存在と時間』刊行後の一九二九年に出版された『カントと形而上学の問題』（GA3）に顕著である。ここでは、「あらゆる認識が存在的であるのではなく、また存在、認識が存在するときにはそれは存在論的認識によつてのみ可能である」（GA3, 20）と言われている。

(12) Ludwig Wittgenstein, *Tractatus logico-philosophicus* (in Ludwig Wittgenstein *Werkausgabe*, Bd.1, Frankfurt a. M.: Suhrkamp, 2006, S.7-85). 以下『論考』からの引用の出典は、序文 (ebd., S.9f.) からの引用の場合を除いて略記 T と節番号を本文中に記す。なお、以下ではズーアカンパ版のウィトゲンシュタイン全集は WA と巻数をもつて略記する。

- (13) Cf. Erick Stenius, *Wittgenstein's "Tractatus": A Critical Exposition of its Main Lines of Thought* (Oxford: Basil Blackwell, 1960), pp.214-26.

- (14) Cf. Park, *ibid.*, pp.27–34.
- (15) Cf. Bertrand Russell, “Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description,” (in his *Mysticism and Logic and Other Essays*, London: George Allen & Unwin, 1963, pp.209–232), p.152; *The Problems of Philosophy* (Oxford: Oxford University Press, 1959 (1912)), p.46.
- (16) Cf. Bertrand Russell, *Theory of Knowledge: The 1913 Manuscript* — *The Collected Papers of Bertrand Russell*, Vol.7 (edited by Elizabeth R. Eames in collaboration with Kenneth Blackwell, London: George Allen & Unwin, 1984), pp.97–98.
- (17) Cf. Ludwig Wittgenstein, *Letters to Russell, Keynes and Moore* (edited by G. H. von Wright, Ithaca: Cornell University Press, 1974), p.23.
- (18) Ludwig Wittgenstein, *Tagebücher* (in WA1, S.87–223), S.129.
- (19) Cf. Stephen A. Erickson, *Language and Being: An Analytic Phenomenology* (New Haven and London: Yale University Press, 1970), p.28.
- (20) つれづつては、武笠行雄『「論理哲学論考」とフレーゲ』（飯田隆編『ワットゲンシュタイン読本』、法政大学出版局、一九九五年、九六—一〇六頁所収）を参照せよ。
- (21) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft* (in *Kants gesammelte Schriften*, Bd. III. Hg. v. d. Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften, Berlin 1911, A52/B76).
- (22) Ludwig Wittgenstein, “Some Remarks on Logical Form” (in *Ludwig Wittgenstein: Philosophical Occasions 1912–1951*, James C. Klagge & Alfred Nordmann (eds.), Indianapolis/Cambridge: Hackett Publishing Company, pp.29–35), p.31. 以下、同書からの引用の出典は略記 PO ならびに頁数を本文中に記す。
- (23) Ludwig Wittgenstein, *Philosophische Bemerkungen*. Aus dem Nachlaß herausgegeben von Rush Rhees (WA2), § 83 (S.111). 以下、同書からの引用の出典は略記 PB ならびに節番号を本文中に記す。
- (24) Ludwig Wittgenstein, *Philosophical Investigations/Philosophische Untersuchungen*. The German text, with an English translation by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker and Joachim Schulte. Revised 4th edition by P.

M. S. Hacker and Joachim Schulte. Blackwell, 2009. 以下、同書からの引用の出典は略記 PU-I (第一部) ないし PU-II (第二部) と節番号を本文中に記す。

- (25) Ludwig Wittgenstein, *Philosophische Grammatik* (WA4, hg. v. Rush Rhees). 以下、同書からの引用の出典は、PG-I (第一部) ないし PG-II (第二部) と頁番号を本文中に記す。
- (26) Cf. Hintikka and Hintikka, *Investigating Wittgenstein*, pp.187-8.
- (27) Ludwig Wittgenstein, *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik* (WA6, hg. v. G. E. M. Anscombe, Rush Rhees und G. H. Von Wright). 以下、同書からの引用は略記 BGM ならびに節番号 (ローマ数字) と頁数 (アラビア数字) を本文中に記す。
- (28) Cf. Ludwig Wittgenstein, *The Big Typescript: TS 213* (German-English Scholars' Edition, edited by C. Grant Luckhardt and Maximilian A. E. Aue, Wiley-Blackwell, 2005), § 94 (pp.320-322).
- (29) Desmond Lee (ed.), *Wittgenstein's Lectures: Cambridge 1930-1932*. From the Notes of John King and Desmond Lee (Oxford: Basil Blackwell, 1980), p.47 (強調引用部)。以下、同書からの引用の出典は略記 L1 と頁数を本文中に記す。
- (30) Cf. Juliet Floyd, "On Being Surprised: Wittgenstein on Aspect-Perception" (in William Day and Victor J. Krebs (eds.), *Seeing Wittgenstein Anew: New Essays on Aspect-seeing* (Cambridge University Press, 2010, pp.314-337), p.316.
- (31) G. P. Baker & P. M. S. Hacker, *Wittgenstein: Rules, Grammar and Necessity*. Volume 2 of *An Analytical Commentary on the Philosophical Investigations*, Essays and Exegesis of § 185-242 (Blackwell Publishing, 1991), p.36.
- (32) Ludwig Wittgenstein, *Über Gewißheit* (in WA8, S.113-257), § 501.
- (33) Ludwig Wittgenstein, *Bemerkungen über die Farben* (in WA8, S.7-112).